



Title	Family Language Policy形成に影響を与える要因に関する一考察：タイに生きる泰日国際家族A家の父・母・子3者の語りから
Author(s)	松岡, 里奈; 深澤, 伸子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2022, 18, p. 48-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91724
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究論文》

Family Language Policy形成に影響を与える要因に関する一考察

— タイに生きる泰日国際家族A家の父・母・子3者の語りから —

松岡 里奈 (大阪大学日本語日本文化教育センター)

matsuoka@cjlc.osaka-u.ac.jp

深澤 伸子 (タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会)

shinko.fukazawa@gmail.com

A Study on Factors in the Formation of a Family Language Policy:

From the Narratives of the Father, Mother, and Child of the Thai-Japanese Family

A Living in Thailand

MATSUOKA Rina & FUKAZAWA Shinko

要 旨

本研究は複数言語環境で育つ子どもの支援のためには家族の Family Language Policy (FLP) を理解する必要があると考え、タイの泰日国際家族 A 家を事例に FLP 影響要因を家族全員の視点から明らかにするものである。学校選択を軸に分析し、「FLP ダイナミックモデル」(Curdt-Christiansen & Huang, 2020) との対照を通して考察を試みる。分析の結果、A 家の FLP は「3 言語の習得を目指し、その習得は学校に入れることで目指される」だとわかった。FLP 影響要因には、【日本語能力発達の不安】など子どもの言語能力評価に関するものや【地理的条件】という「FLP ダイナミックモデル」に含まれないカテゴリーがあった。この結果から、「FLP ダイナミックモデル」の内的要因には「言語能力評価要因」、外的要因には「社会生活的要因」を追加するという、タイ独自のモデル形成の必要性が示唆された。また、進学時ごとの学校選択の要因を明らかにしたことで、FLP の動態的様相も示した。

Abstract

The purpose of this paper is to identify the Family Language Policy (FLP) of the Thai-Japanese Family A living in Thailand as well as factors that influence its formation, as perceived by the parents and child. The deeper understanding of the FLP of the Thai-Japanese Family gained through this paper will provide insight into how to support the language development and growth of children growing up in multilingual environments. This paper analyzes factors that influence elements of FLPs – in particular school choice – and discusses them in comparison with the “Dynamic model of family language policy” (Curdt-Christiansen and Huang, 2020). The analysis reveals that the parents’ FLP is “for their child to learn the three languages and to achieve this by getting him into school.” The influencing factors included those related to the evaluation of the child’s language ability, such as [Anxiety about Japanese language development] and [Geographical conditions]. These results suggest the need to form a model unique to Thailand by adding

“language ability assessment factors” to the internal factors of the “FLP Dynamic Model” and “social life factors” to the external factors. This paper also shows the dynamic aspects of FLP by identifying factors contributing to each school choice.

キーワード：Family Language Policy影響要因、泰日国際家族、学校選択、親子の語り、言語選択

1. はじめに

複数言語で子どもを育てる国際家族は、どのような理由や目的で、何に影響を受けて Family Language Policy（家族の言語政策、以下 FLP という）を形成し、子どもを育てるのか。筆者らは、これまでタイに生きる泰日国際家族の子どもに注目し、子どもの視点で子どもの言語環境や言語意識を中心に調査し、子ども自身がその言語体験をどう意味づけているかを見てきた（松岡, 2016, 2018; 深澤・池上, 2018）。しかしながら、子どもの意味づけの裏には、その「家族」が形成する FLP の影響があるのではないだろうか。そこで、複数言語環境で育つ子どもの言語発達や成長を支援する知見につなげるために、まずは家族の FLP を理解する必要があると考え、タイに生きる泰日国際家族 A 家を事例に、A 家の FLP 形成に影響を与える要因（以下、FLP 影響要因）を明らかにすることを本稿の目的とする。また、タイに生きる泰日国際家族の FLP は子どもの学校選択の時期に明確に立ち現れてくると考え、学校選択を軸に FLP 影響要因を明らかにする。

1.1 なぜ学校選択を軸にするのか：タイの教育事情

タイは 1999 年の国家教育法の制定以来 4 度の改訂のたびに英語教育推進策が施行された、国民に英語習得を推進する国である。そのため、幼稚園は、タイ語が学習言語の幼稚園だけでなく、アメリカ系・イギリス系などのインターナショナル幼稚園が存在する。小学校以降は、現地校であっても英語プログラムを持つ学校が全国に 200 校強¹⁾ 存在し、インターナショナル校もバンコクだけで 147 校（轟, 2015）ある。さらにタイのカリキュラムを英語・タイ語の 2 言語で教育するバイリンガル校²⁾ という教育機関もある。それだけでなく日本語で日本式の教育を受けさせようと思えば、日系幼稚園、日本人小・中学校³⁾ があり、中学までは学習の場が保証されている。この他、中華系インターナショナル校なども存在し、多岐にわたる学校の選択肢がある。したがって、各学校の選択には言語選択が必然的に起こるが、そこには FLP が影響すると考え、本稿では学校選択を軸に、FLP 影響要因を明らかにしていく。

1.2 なぜ泰日国際家族である A 家を事例とするのか

タイは 1.1 で述べた通り英語教育が推奨されているが、泰日国際家族の子どもにとって書字体系が全く異なるタイ語・日本語・英語の習得には困難を要することが予想される。また、本研究のフィールドであるタイでは公用語はタイ語のみで、泰日国際家族の親の母語はタイ語と日本語の 2 言語ということになる。タイにおける英語の位置づけは、公用語としてではなく、「国際競争力の強化策の一環として」（柴山他, 2020, p. 315）の位置づけである。このような理由によって言語選択の対象が 3 言語になる国における FLP の影響要因は管見の限りまだ明らかではない。したがって、タイに生き

る泰日国際家族に焦点を当てることには意義があると考える。では、なぜ A 家を事例とするのか。筆者等は、子どもの成長に合わせて FLP 影響要因は変わっていくものだと捉える必要があると考えており、それを実証するためにも、すでに大学までの学校選択を終えた子どもを持つ家族を対象とする必要があると考えた。そこで、成人した子どもを持つ A 家を対象として、幼少期から大学選択までの FLP の影響要因を捉えることができ、ひとつの家族の FLP 理解における信頼性が高まると考えた。また、A 家の息子ヤス（仮名）は、日系幼稚園、日本人小・中学校、タイ語と英語のバイリンガル高校、そしてタイの大学の日本語学科に進んだという学校履歴を持つ。1.1 で述べたタイの教育事情により、タイ語と日本語に加え、英語の習得を目指すことは多くの泰日国際家族に見られることがある（柴山他, 2020; 渡辺・久保, 2018）。そこで、タイ語と日本語と英語の 3 言語選択をし、すでに成人を迎えた子どもを持つ A 家は、3 言語習得を目指すタイの泰日国際家族の FLP 影響要因を明らかにしていくうえでふさわしい対象であると判断した。さらに、日本人小・中学校を卒業したヤスがなぜ大学で日本語学科を選択したのか、彼の日本語学習の意味を松岡（2018）すでに明らかにしており、大学選択は子ども自身の言語政策による選択だが、高校までの選択は親によるものだったことがわかっている。中学まで日本人学校に通い、高校で学習言語を変えて 3 言語習得を目指した親の FLP に影響を与えた要因とはどのようなものなのだろうか。また、松岡（2018）では焦点を当たなかつたヤスの両親の視点を中心に据えることにより、泰日国際家族の FLP を家族全体の視点で捉えることができると判断した。以上のことから A 家を対象にした。

2. 先行研究

本節では 2.1 で FLP の定義を述べ、2.2 でタイの泰日国際家族を対象とした先行研究から泰日国際家族の FLP 影響要因に関連するものを挙げ、先行研究での不足点を指摘する。2.3 では先行研究において作られた FLP 影響要因のモデルを概説し、本研究の立場を述べる。

2.1 FLP とは

FLP は、家族における言語選択や家族間でのリテラシー実践に関連した、家族メンバーによる明示的かつ明白な、また暗黙的かつ隠然とした言語計画と定義される（King, Fogle & Logan-Terry, 2008; Curdt-Christiansen, 2018）。Curdt-Christiansen（2018）によると、「明示的 FLP とは、言語学習やリテラシーの発達に必要な言語的条件や文脈を提供するために、大人が意図的かつ観察可能な努力をし、意識的に関与・投資すること」（p. 420, 拙訳）で、「暗黙的 FLP とは、イデオロギー的な信念の結果として家族の中で行われているデフォルトの言語習慣のこと」（p. 420, 拙訳）である。つまり、子どもが通う学校の選択は親の意図的な努力であり、意識的な投資であると捉えることができ、明示的 FLP の表れであると言える。したがって、本稿において学校選択を軸に A 家の FLP 影響要因を捉えるということは、A 家の FLP の明示的な側面における影響要因を明らかにするものであると言える。

2.2 タイの泰日国際家族に関する先行研究

現在のところ FLP 研究は King and Fogle（2013）で示されているように西洋諸国で取り組まれていることが多く、タイをフィールドに「FLP」を掲げて研究をしたもののはまだ管見の限りないが、

FLP研究として見ることのできるタイの泰日国際家族の研究としては、川上（2017）、柴山他（2020）、渡辺・久保（2018）が挙げられる。

川上（2017）はタイ人男性と結婚した日本人女性2名とその子どもたちにインタビュー調査をし、泰日国際家族の親と子の言語実践を「移動とことば」という軸で分析した。親と子の「ことばの経験と記憶」は「母子で異なる意味世界を形成している」（p. 17）と主張し、親が決めた方針が子どもの成長とともに変化し、選択主体は子どもに変わっていったことを示した。川上の言う親が決めた方針はFLPであると捉えることができる。しかし、川上（2017）ではそのFLPで形成されたタイで育つ子どもと親の双方にとってのことばとの関わりやその価値などが詳細に述べられているが、それに影響を与える要因は明らかではない。

柴山他（2020）は、子どもの言語選択の要因に教育戦略の視点を組み込み、泰日国際家族5家族の父親と母親の双方に調査し、言語選択の要因を報告した。夫婦という家族単位の言語選択に踏み込んだ、タイのFLP研究に關わる先駆的調査と言える。柴山他（2020）はタイに住む泰日国際家族の教育戦略の特徴として、日本語・タイ語・英語の3言語習得を子どもに期待していることを明らかにした。また、その教育戦略に影響を与える要因には「タイの学校教育における外国語教育強化策」（p. 329）と日本人学校があるなどの「居住地域の特殊性」（p. 330）があることを明らかにし、社会的な要因があることがわかった。しかし、この報告では子どもがまだ小学校低学年であることから、初等教育以降の学校選択は見通しとして報告されるにとどまっており、小学校時点で持っている親のFLPでしかないと捉えられる。また、川上（2017）、柴山他（2020）共に対象とした母親は日本人であるが、タイ人と日本人の婚姻は男性が日本人である夫婦が圧倒的に多いことから（厚生労働省, 2019）、日本人母の調査だけでは泰日国際家族のFLP研究としては不足している。

一方で、日本人父を含めた調査も存在する。渡辺・久保（2018）は経済学的視点から泰日国際家族の親の教育観の考察を行っている。タイ人と結婚した女性5人と男性5人を調査し、泰日国際家族は日本人親の男女を問わず英語・日本語・タイ語の3言語習得を目指す教育観があることを示し、日本語教育が「付加的な資本獲得への投資とも考えられていたのに比して、英語習得は子どもの将来の基礎的な社会経済的な資本になると強く信じられていた。」（p. 13）と、言語の経済的価値が言語選択に強く影響する要因であることを述べている。しかし、この論考は経済学的視点であることから、経済学的視点以外のFLP影響要因はアイデンティティ以外述べられていない。

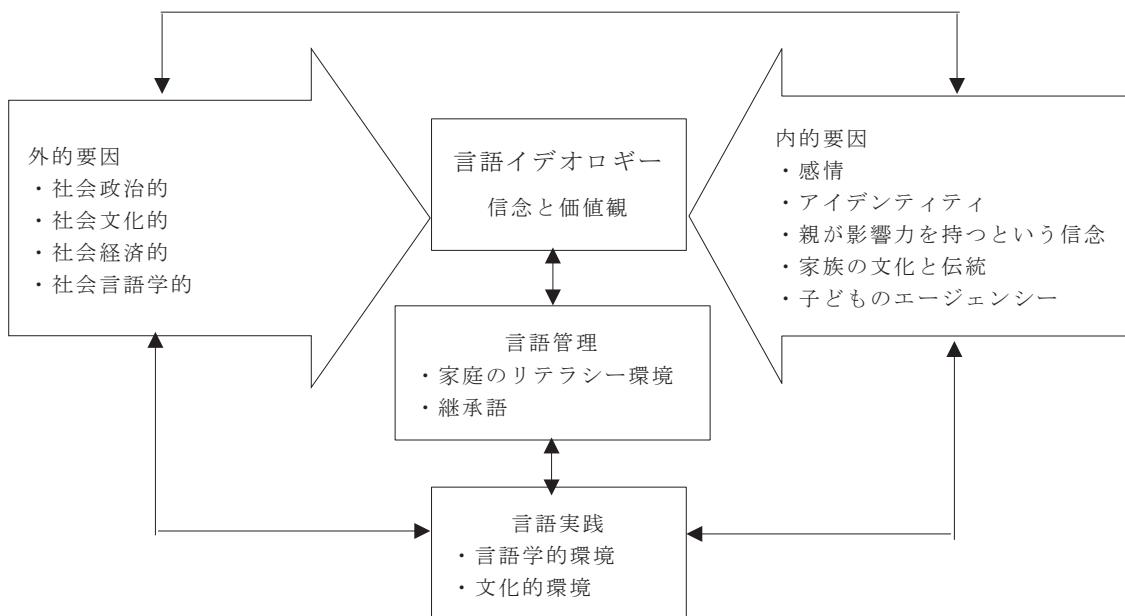
以上のように、「FLP研究」と名はついていなくとも、泰日国際家族の子どもの複数言語習得や学校選択に関する研究は存在し、これらの研究から、泰日国際家族は英語・日本語・タイ語の3言語習得を目指す教育観があること、また、言語選択にタイの言語政策が影響していること、言語の経済的価値、特に日本語と英語の経済的価値が信じられていることが指摘されている。また、学校選択は子どもの成長とともに子どもが選択主体になっていくことも明らかになっている。

しかし、柴山他（2020）、渡辺・久保（2018）は、親の調査のみである。どの研究も、子どもの成長とともに長期にわたり研究されたことがない点、泰日国際家族の家族全員の調査ではないことを指摘したい。特に近年のFLP研究では、子どもの視点の重要性が指摘されている（Fogle & King, 2013; Wilson, 2020）。1.2で述べた通り、A家を対象にすればFLP形成に子どもがどのように関与していたのかも含めて分析することができる。そこで、本稿では家族全員に対する5年間にわたる調査からFLP影響要因を明らかにすることを試みる。

2.3 FLP 影響要因に関する先行研究

King and Fogle (2013) によると、FLP 研究は近年、広範で多様な家族のタイプ、言語、社会的文脈に焦点を当てるようになり、また家族がどのように複数の言語を管理しているかを調査する研究が増加している (p. 172, 拙訳)。だが、FLP に影響する要因に関する先行研究は、この分野においては Curdt-Christiansen (2009, 2014, 2018)、Curdt-Christiansen and Huang (2020) など、管見の限り Curdt-Christiansen が関わる研究に限られており、これらの研究は本研究に対しても重要な知見を与えるものである。その中で Curdt-Christiansen and Huang (2020) は FLP に影響を与える要因を「FLP ダイナミックモデル」(図 1) に示した。

図 1 FLP ダイナミックモデル (Curdt-Christiansen & Huang, 2020、拙訳の上一部編集⁴⁾)



「FLP ダイナミックモデル」(Curdt-Christiansen & Huang, 2020) は、Curdt-Christiansen (2009, 2014, 2018) の研究結果を総合して作られたものである。このモデルは、「家族が特定の言語をどのように認識しているかという『言語イデオロギー』、個人が言語を使って実際にを行うことである『言語実践』、特定の言語を維持・発展させるために用いられる介入手段を意味する『言語管理』」(p. 175, 拙訳) という相互に関連する 3 つの要素で構成されている Spolsky (2004, 2009) の言語政策の 3 要素モデルと、言語社会化理論 (Ochs & Schieffelin, 2011) を理論的背景として作られている。また、外的要因と内的要因が家族の「言語イデオロギー」に影響を与えるとし、これらは「実際には密接に関連しており、時には曖昧である」(p. 176, 拙訳) と述べられている。要因の具体的な説明は、3.4 で後述する。本研究では、この「FLP ダイナミックモデル」で示されている要因を通して考察を試みる。

しかしながら、Curdt-Christiansen がこのモデルを作るもととなったのは、公用語はフランス語（国家レベルでは英語とフランス語）、家庭内言語は中国語という言語状況にいるカナダのケベック州における中国系移民家族を対象とした論考 (Curdt-Christiansen, 2009) と、英語、中国語、マレー語、

タミール語が公用語のシンガポールに住む、英語と中国語の狭間に生きる中華系家族を対象とした論考 (Curdt-Christiansen, 2014) である。このように Curdt-Christiansen は言語政策が特殊な地域における公用語と家族の母語の対立における FLP を検討しモデルにまとめており、1.2 で述べた通り本研究が対象とするタイとは状況が異なる。そこで、この「FLP ダイナミックモデル」を通して泰日国際家族の FLP 影響要因を考察する中で、このモデルはタイの FLP 研究でも適用可能なのか、モデルそのものの批判的な検討も試みる。

3. 調査・分析概要

本節ではまず 3.1 で調査協力家族の紹介及び筆者らとの関係を述べ、3.2 で調査の方法を説明する。3.3 では分析の対象となるデータについて説明し、3.4 で分析の方法を説明する。

3.1 調査協力家族

A 家はタイの首都バンコク近郊に住む、日本人の父親、タイ人の母親、息子ヤス（仮名、2022 年現在は成人している）の 3 人家族である。父は結婚を機にタイ駐在となり、ヤスが小学校入学の年に日本に帰国指示が出て家族で日本に移動したが、ヤスが小学 3 年生になる時に転職し、転職先であるタイに家族で移動した。父は仕事で忙しくヤスといふる時間は限られていた。父はタイ移住当初からいすれは日本に戻るつもりであり、母もそれに同意している。調査が始まった 2016 年頃の家庭内言語は、父とヤスは日本語、母とヤスはタイ語で、夫婦間は主に英語、3 人揃うと日本語とタイ語を混ぜて使用していた。第一著者とヤスの関係はタイ勤務時代の教師と学生にあたり、卒業後も様々に関わり長期にわたる信頼関係がある。ヤスを通して両親とも関係性を築いている。またヤスは著者等が所属する研究会の活動にも参加して第二著者とも関係を深め、ラポールが形成された状態での調査であったと言える。

3.2 調査の概要

調査は、2021 年 4 月に行い、A 家の全員に学校選択に関する考えを時期ごとに語ってもらう必要があることから、全員に対して学校の選択過程ごとに質問し、その他には自由に語ってもらう半構造化インタビューを行った。タイ人母へのインタビューは、タイ語の通訳が入ったため、やりとりに時間がかかり、2 回かけて調査を行った。ラポールがすでに形成されていたため、調査はオンラインインタビューが可能であると判断して Zoom (Web 会議ツール) を使用した。実施にあたり協力は任意であることをそれぞれに伝え、同意を得た上で調査を開始した。

3.3 分析の対象

分析の対象は表 1 の通り、3.2 で述べた 2021 年に得たデータと、松岡 (2018) で対象としたデータも含めた両著者による過去のデータも使用した。

表1 分析の対象となるインタビューの詳細

インタビューイ	インタビュ一年月日（各時間）	総時間数
日本人父	① 2016.7.19（息子・母同席、36分） ② 2021.4.3（53分）	1時間29分
タイ人母 (通訳入り)	① 2021.4.8（1時間53分） ② 2021.4.26（2時間22分）	4時間15分
息子ヤス	① 2016.5.6（2時間24分） ② 2016.6.18（2時間） ③ 2016.7.19（3時間19分） ④ 2017.6.3（3時間） ⑤ 2021.4.28（1時間29分）	12時間12分

注 両著者の単独・共同調査が混在するが、共同利用の許可を得ている。

両著者は息子ヤスに対して、ヤスが大学1年生を終える時期（2016年）から学校選択や言語選択、言語使用、各言語に対する意識などについて経年調査を行っており、2016年には父親にも同様のことを調査したデータが存在するため、これらのデータを再分析することでA家のFLPをより長い視点で捉えることができると考えた。そこで、過去のデータを使用する許可を改めて求め、同意を得て、本研究の目的に合わせて再分析を行った。

3.4 分析の方法

分析の方法には、オープン・コーディング（サトウ他, 2019）を援用した。この手法は先行研究が少ない分野で探索的に研究を行う場合などに有効な方法であるとされており、本稿のように先行研究の限られるFLPに影響する要因分析において援用するには妥当な方法であると考えた。分析の手順は以下の通りである。（1）全てのデータを文字化し、（2）タイ語部分を翻訳、（3）父・母・息子の学校選択に関わる語りを3者ごとに抽出、（4）3者ごとにラベルを付与、（5）学校選択の過程ごとに分けた。そして、（6）FLPを主導する父と母の類似しているラベルを時代ごとに集約しカテゴリーを立てた。（7）その学校選択に対する息子の関わりを息子の語りから探った。（4）～（7）の過程は第一著者の分析の後、両著者共同で見直しを行い、ラベル及びカテゴリーの調整を行った。そして、これらの分析で得られたカテゴリーが、Curdt-Christiansen and Huang (2020) で示されたFLPの影響要因（図1）のどの部分に該当するのか分類を行った。表2に、この分析に使用した「FLPダイナミックモデル」の要因の内訳、及びCurdt-Christiansen and Huang (2020) で述べられている各要因の説明、及び本研究のために振った番号を提示する。

表2 「FLPダイナミックモデル」 (Curdt-Christiansen & Huang, 2020) の要因詳細（拙訳）

	要因名	説明（拙訳・要約）	番号
外的要因	社会政治的要因	政治的な決定における個人の権利、資源、教育へのアクセス（例：教育における言語政策）、市民活動に関係したもの。	A ①
	社会文化的要因	特定の言語が表す象徴的な文化的価値のこと。この視点では言語は文化の表れとして見なされる。主流文化や学校文化、仲間の文化は、家庭文化と競合したり強化したりする強い力となることがある。	A ②
	社会経済的要因	特定の言語が喚起する経済力や言語資本、またはその逆のこと (Bourdieu, 1996)。	A ③
	社会言語学的要因	どのような言語が良いか、受け入れられるか、悪いか、受け入れられないかという親の信念に影響する資源となるもの。	A ④
内的要因	感情的要因	情緒的な感情や記憶を言語によって共有することによって、親と子どものつながりが深まること。また言語の共有によって家族の世代間のつながりと理解を可能にすること。	B ①
	アイデンティティ要因	民族的意識を含めた、子どもの自己認識に関わること。	B ②
	文化的要因	家族が子どもに継承したいと思い、規範としている文化的慣習や社会的規範のこと。	B ③
	親が影響力を持つという信念 (De Houwer, 1999)	親の過去の教育経験、文化的な生い立ちや気質、移住経験、バイリンガルの子どもを育てるための知識などによって動機づけられ、子どもの言語的・教育的発達に対する親の期待が反映された、家庭言語やバイリンガルで子どもを育てる能力と責任についての親の信念のこと。	B ④
	子どものエージェンシー	家族の言語使用のパターンを決定する際に子どもが主体的に参加すること。	B ⑤

4. 分析結果

本節では、まず分析の結果見えてきたA家のFLPを4.1で述べる。4.2からは4.1で述べるFLPに影響する要因を学校選択の時期に分けて述べる。語りのデータ番号は、「インタビュー回／発話者／語り番号」を（1AP110）のように記す。発話者は、A家の父をAP、母をAM、母の通訳者を「訳」、息子のヤスをYと記す。また、語りは「」、ラベルを本文中に記述する場合は「」、カテゴリーは【】で示す。父母のラベル及びカテゴリーは表3,4,5にまとめ、子どものラベルは本文中に〈〉で記述する。

4.1 A家のFLPとは

A家のFLP影響要因を分析した結果、学校選択の時期にかかわらず述べられた父母の言語選択方針（表3）が見られ、そこから父母のFLPは「3言語の習得を目指し、その習得は学校に入ることで目指される」とわかった。なぜそのように言えるのか述べる。

表3 学校選択の時期にかかわらず述べられた父母の言語選択方針

	カテゴリー	ラベル(数)	語り番号
日本人父	タイ語と日本語の両言語習得による経済的価値	経済的な自立支援のための日本語とタイ語の習得(1)	2AP279
	言語習得方法の信念	学校で言語を習得するという信念(1)	2AP281
タイ人母	英語習得希望	英語能力の重要性(1)	2 訳 124
	言語習得方法の信念	英語習得は学校で十分(1)	2 訳 125
	ヤスのタイ語能力補完	ヤスのタイ語能力伸長の狙い(1)	2 訳 126

父に、ヤスの将来に不安がなかったかと尋ねると、「日本語とタイ語が100% どっちもできれば、食いつばぐれることはないだろうと思ってましたんで」(2AP279) と、「経済的な自立支援のための日本語とタイ語の習得】として【タイ語と日本語の両言語習得による経済的価値】を表明した。母は「ほんとは3つの言語、できるようになってほしかったんですけど、英語も重要ですので」(2 訳 124) と【英語能力の重要性】を述べ、実際にヤスはタイ語と英語で教科学習をするバイリンガル高校に進学したことから、A 家は最終的に3言語習得を目指したと考えていいだろう。また、父の 2AP279 の語りで言語の100%の習得が目指されていることがわかり、その方法として日本人学校とタイの学校に入れたのかと尋ねると、「そうですね」(2AP281) と肯定したことから、言語習得を目指し学校選択をしたことが【言語習得方法の信念】であったことがわかる。また母も「英語は学校ではたぶん教えているので、お母さんは塾に行かせたりはしなかった」(2 訳 125) と語り、【学校で言語を習得するという信念】としての【言語習得方法の信念】を表明した。以上の語りは学校選択の各時期における語りではなく、時期で分けられない一貫した父と母の信念として語られ、A 家の FLP の核となると考えられる。このことから A 家の FLP は「3言語の習得を目指し、その習得は学校に入れることで目指される」と考えた。それでは 4.2 から、この FLP はどのような要因に影響されたのか、学校選択ごとに見ていく。

4.2 A 家の FLP に影響を与える要因

本項では A 家の FLP 影響要因を学校選択ごとに分け、学校選択ごとの変化を追いながら A 家の FLP 影響要因を明らかにしていく。要因の変化が見えるよう、日本語を学習言語とした幼稚園と小学校（中学は併設）を合わせて結果を示し、タイ語と英語を学習言語とした高校と分けて示す。ただし、紙幅の都合上ラベル数が多いカテゴリーを中心に記述する。また影響要因を示した表4, 5 には「FLP ダイナミックモデル」の要因との対照も記載しているが、これに関しては 5. で考察する。

4.2.1 日本語を学習言語にした日系幼稚園と日本人小学校編入選択に見る FLP 影響要因

4.2.1.1 日本人父、タイ人母の日系幼稚園及び日本人小学校編入選択要因

分析の結果、15 のカテゴリー、19 のラベルが生成された（表4）。バンコクには 1.1 で述べた通りタイの現地幼稚園やインターナショナル幼稚園、日系幼稚園があるが、A 家は日系幼稚園を選択した。表4を見られたい。父は「幼稚園に入る直前までは、ヤスはお母さんとタイ語でしか喋れませんでした」(2AP100) と、入園前にはヤスの日本語能力が育っていなかったことを述べ、「幼稚園に放り込

んじやえば日本語喋れるようになるだろうと思って。で、バイリンガルになるだろうっていうことで。放り込んだら、半年もしない内に日本語喋り出しましたから」(2AP101)と述べた。父に【学校で言語を習得するという信念と期待】という【言語習得方法の信念】が見られたことは、この日系幼稚園時代のヤスの日本語習得が成功体験となったと推測される。一方で母は、タイ語も日本語も両方できる子になってほしかったのかと聞かれ、「日本語の発達のことなんんですけど、タイ語みたいに流ちょうに喋れるようになってほしかったから、心配していました」(2 訳 72)と【ヤスの日本語能力発達の不安】があったと述べた。この【ヤスの日本語能力発達の不安】には最も多い7つのラベルが含まれ、これが母にとっては日系幼稚園選択の重要な要因であったことがわかる。つまり、この日系幼稚園選択は、日本語能力の不安を解決するための幼稚園選択であったことがわかる。

表4 日系幼稚園選択と日本人小学校3年生編入選択の要因

	カテゴリー	ラベル(数)	語り番号	モデル
日系幼稚園選択				
日本人父	ヤスのタイ語能力評価	幼児期のヤスはタイ語の口頭能力のみ(2)	2AP100, 2AP103	該当無
		母子のコミュニケーションで培ったタイ語の口頭能力(1)	1AP4	該当無
	言語習得方法の信念	学校で言語を習得するという信念と期待(3)	2AP99, 2AP101, 1AP7	B④
	両親戚とのつながり影響	日本とタイの親戚とのコミュニケーション(1)	1AP6	B①
タイ人母	ヤスの日本語能力発達の不安	遅かった日本語発達(3)	2 訳 72, 2 訳 73, 2 訳 79	該当無
		切に願った日本語の発達(3)	2 訳 78, 2 訳 86, 2 訳 94	B②
		父親との接触機会の少なさ(1)	2 訳 40	B①
	ヤスの日本語習得への願望	日本人小学校入学を見据えた日本語習得(1)	2 訳 41	B④
	ヤスのタイ語能力評価	不安のないタイ語の生活言語能力(1)	2 訳 39	該当無
日本人小学校3年生編入選択				
日本人父	ヤスの日本語能力発達の不安	日本語能力の喪失不安(1)	1AP22	該当無
	日本語・日本文化を学べるならば当然学ぶという信念	日本語が学べる条件にあれば日本語習得を望む(1)	1AP253	A②
	条件に合わせた学校選択をすべきという信念	タイに定住するつもりはない(1)	1AP254	B④
	両親戚とのつながり影響	両親戚との関係性維持のため(1)	2AP104	B①
	日本人としての日本語習得	日本人なら日本語ができるべき(1)	2AP290, 2 訳 149	B②
タイ人母	日本人としての日本語習得	日本人親の言語と文化の継承(1)	2 訳 144	B②, B③
		日本人として生きてほしい(1)	2 訳 149	B②
	選択肢にないタイの小学校	タイの小学校は検討対象外(1)	2AM137	B④
	タイ語支援は母でも可能	タイ語は母が教えられる(2)	2 訳 145	B④
	学校外の言語発達支援	タイ語能力は塾で補強する計画(1)	2 訳 102	B④

注(表内の「モデル」は「FLP ダイナミックモデル」の略である)

A家はヤスが小学校就学時期に父親に帰国辞令が出て、家族で日本に移動し2年間過ごした。ヤスは自宅近くの日本の公立小学校に通ったが、2年が経過する頃、父親が仕事の場をタイに移すことを決め、ヤスが幼稚園時代に購入した家があるバンコク近隣の県に家族で移動した。そのとき、A家はヤスが小学3年生に編入する学校を、バンコクにある日本人小学校に決めた。父は「で、まあ、小学校2年で日本の教育をやめると、彼もそのまま忘れていくんだろうなと思って、学校は日本人学校に入れようということで、中学校まで、こちらありますでしょ」(1AP22)と述べ、日系幼稚園そして日本に住んだ2年間で培ったヤスの[日本語能力の喪失不安]から日本人小学校への編入を決めたと語った。一方母は、「日本人と結婚したので、日本人学校に入ってほしかったです」(2訳144)と述べ、「日本人親の言語と文化の継承】を願っている。それに加え、「お母さんはタイ人だから自分でタイ語は教えられるので」(2訳145)と、【タイ語支援は母でも可能】という考え方を持っていたことがわかった。タイに生活基盤を移したことでタイ人の母はタイの言語と文化の継承への不安はなくなり、その代わりに日本のアイデンティティや文化と言語の継承不安を抱くようになったということだろう。

4.2.1.2 日系幼稚園・日本人小学校編入選択における子どもの関与と子どもへの影響

ヤスによると、この幼稚園選択にヤス自身は関わっていないという。では誰が決めたのかという問い合わせには「お父さんじゃないですか?」(1Y130)と〈父親の選択〉であると述べ、「そのあたりに住んでましたから、昔は」(1Y131)と、〈日系幼稚園のエリアに居住〉についていたことが理由だらうと推測を述べた。ヤスは当時のことを母親から聞いて覚えており、「で一幼稚園入って、みんな日本語ばかり使ってるから、ぼく一日本語まだわかんなくて、そんときまだいつも泣いてたらしいです」(1Y151)と、〈幼稚園生活での苦労の経験〉を語った。日本人小学校編入についても、「お父さんがどつかいい小学校ないかって探して、で、日本人しかいない小学校あるから、うん、会社の、会社に行くついでに送れるし、行こうってなりました」(1Y314)と、〈父親の選択〉であるという認識を述べた。ヤスはこれらの選択に主体的に関わっていないことがわかる。

4.2.2 タイ語と英語のバイリンガル高校選択

分析の結果、13のカテゴリーと14のラベルが生成された(表5)。ヤスは日本人小学校、そして中学校を卒業した。そしてA家が選んだ高校は、近所にあるタイ語と英語のバイリンガルX高校であった。この選択にはバイリンガル高校であることと、X高校であることに、異なる影響要因があった。

4.2.2.1 日本人父親・タイ人母親のタイ語と英語のバイリンガルX高校選択要因

表5に示したバイリンガル高校選択、及びX高校の選択要因を見られたい。まず、バイリンガル高校選択要因について見ていく。父は、バイリンガル高校入学の理由を聞かれ、「読み書きは苦手だったというレベルでしたんで、会話は100%問題なくやっていましたから」(2AP244)と【ヤスのタイ語能力評価】を語り、ここから【タイ語会話ができるから不便がないという見込み】があったことがわかる。4.1で父がタイ語、日本語の習得において100%を目指していたことを述べた。そこで、タイ語能力100%が実現できることがバイリンガル高校選択の理由かと聞くと「ええ、そんな感じですね」(2AP292)と答えたことから、【タイ語能力を完璧にするため】のバイリンガル高校選択であり、【ヤスのタイ語能力補完】を目指したものだったとわかる。一方で母は、高校選択理由を、「日本語は心

配してたんですけど、結局できる」(1 訳 213) と、「日本人学校で日本語は獲得済み」として、高く【ヤスの日本語能力評価】をし、「ヤス君はまだ英語があまり上手、流暢ではなかったので、英語を教える、全部英語で話す学校がいいなって思って」(1 訳 218) と【ヤスの英語能力の習得】がバイリンガル高校選択の要因となっていた。

表5 タイ語と英語のバイリンガルX高校選択

	カテゴリー	ラベル(数)	語り番号	モデル
タイ語と英語のバイリンガル高校選択				
日本人父	ヤスのタイ語能力評価	タイ語会話ができるから学習の不便がないという見込み(2)	2AP242, 2AP244	該当無
	ヤスの日本語能力評価	日本人学校で日本語は獲得済み(1)	2AP294	該当無
	言語習得方法の信念	言語は学校に入れれば習得できるという信念(1)	1AP24	B ④
	バイリンガル教育の知識	若い間に習得した言語は忘れないという知識(1)	2AP106	B ④
	ヤスのタイ語能力補完	タイ語能力を完璧にするため(1)	2AP292	該当無
	学習言語変更によるヤスへの影響	学習言語が日本語からタイ語と英語に変わることによるヤスへの影響までは考慮せず(1)	2AP240	B ④
タイ人母	ヤスの日本語能力評価	日本人学校で日本語は獲得済み(2)	1 訳 213, 1 訳 215	該当無
	英語習得希望	ヤスの英語能力の習得(2)	1 訳 218, 1 訳 214	A ③, A ④
X 高校選択				
日本人父	地理的条件	通学に誰の負担もかからない距離(3)	1AP48, 2AP120, 2AP114	該当無
	ヤスの学力評価	学力が考慮されない入試システム(2)	1AP34, 2AP124	A ①
	進学の保障	約束されている大学進学(1)	1AP36	A ①
タイ人母	地理的条件	1人で通学可能(5)	1 訳 219, 1 訳 278, 2 訳 237, 1 訳 279, 1 訳 215	該当無
		時間確保のための好立地(2)	1 訳 220, 1 訳 280	該当無
	言語習得方法の信念	タイ語能力と英語能力を伸ばしたいニーズに合致(1)	1 訳 228	B ④

注 (表内の「モデル」は「FLP ダイナミックモデル」の略である)

次に X 高校選択要因を見ていく。表5を見ても明らかのように、X 高校選択要因の内、【地理的条件】が父母合計で 10 見られる。なぜこれほど多いのか。それは、ヤスはバンコク郊外に住んでいたため日本人学校の通学バスには乗れず、中学を卒業するまで毎日両親が運転する車で通っていたことに起因する。母は X 高校選択理由を聞かれ、「他の中学校の友達はインターナショナルスクールの高校に行く子が多かったんですけど、でもヤス君の家は遠いので。ですから、行き帰りの便利なこの高校に決めました」(2 訳 237) と述べ、近所にあり【1人で通学可能】である高校を選択したことを述べた。これは父も同様で、「家の近くの X 大学の附属だったら、もう渋滞も関係なくすぐそこだから行けるんだよって。楽なんだよっていうことで納得させてましたね」(2AP114) と【通学に誰の負担もかか

らない距離】であることを述べたことから、【地理的条件】がX高校を選択した非常に大きな要因だったことがわかる。母に小・中学校時代の生活について尋ねた際に、日本在住時のヤスの小学1・2年生時代の放課後は外で走り回って遊んでいた生活を引き合いに出し、「(日本人学校時代は) そういう落ち着いた生活っていうか…はできなくて、なぜならすごい遠かったです」(1訳98)と通学先までの距離による負担について述べたことからも、日本人学校時代の送迎にかかる親の負担及び子ども自身の負担を高校では避けたいという思いがあったことがわかる。したがって、【地理的条件】はA家にとって重要な高校選択要因であることがわかる。

また父の【ヤスの学力評価】もこのX高校選択の大きな要因であることがわかった。父はヤスの学力を、「(中学時代は) 最下位グループじゃなくて、最下位でぶっちぎりで」(1AP34)と評価している。そしてX高校選択の理由については、「入学してから卒業するまでずっと最下位でしたんで。だから他に試験受けて入れるとこもないでしょ?」(2AP124)と述べた。X高校の入試は、[学力が考慮されない入試システム]で入試への負担がなかったのである。また、X高校からX大学への進学は附属高校であるX高校の成績が考慮されない入試システムであり、父は「X大学の附属のX校に放り込んで、で、一応そこを修了できれば、学力は最悪でもX大学に入ってくれるはずだから」(1AP36)と、成績不振の息子の大学【進学の保障】がされている学校として将来を見据えてX高校を選んだことがわかった。

4.2.2.2 バイリンガルX高校選択における子どもの関与と子どもへの影響とその後

実はヤスは日本にあるZ高校を〈学費の安さ〉と〈寮生活〉を理由に志望し、〈日本の高校への進学希望〉があったことを語った。理由を聞くと、「タイの学校に入る気がしなかった」(1Y734)と〈タイの学校で学べる見通しのなさ〉を述べ、さらに〈学費の高さによる経済的理由〉と〈英語能力不足〉でインターナショナル校は諦めたことも語った。だが、日本のZ高校には合格できず、父がバイリンガルX高校を薦めた。ヤスは「ここに入るんだったら、新しくできたバンコク日本人学校の姉妹校(中略)に行きたいんだけどって言ったんですけど、(中略)近くのX高校の方が安くて近いからそこにしなと言われて、そこに決めました」(5Y95~97)と述べ、日系高校への進学は反対され、〈学費の安さ〉と〈地理的条件〉を理由に〈父からの説得〉でバイリンガルX高校への進学を決めたと述べた。つまりヤス自身の希望ではない高校選択であった。

本稿ではここまで高校選択までの選択要因を述べてきた。大学の選択要因については親のラベルが少なかったため表にはせず、ここで述べる。分析した結果、大学選択要因には、母が関係するラベルはなく、大学選択には関係していないことがわかった。一方、父は高校選択と同様【通学に誰の負担もかからない距離】である【地理的条件】を1つ述べたが、[大学進学が保証されていた高校選択]による【保証された進学先】が2つ確認できた。ここから、父は大学選択を主導していないことがわかる。また、日本語学科選択について父は、[ヤスにとっての唯一の選択肢]1つ、[学力の原因]1つを含んだ【ヤスがした学校選択に対する評価】をしており、[ヤスが決めた日本語学科選択を許容]、つまり【ヤスの選択を許容】した選択であったことがわかった。これらから、大学及び日本語学科選択はヤスの主導であったと思われる。

5. 考察

分析の結果、A 家における両親の FLP 影響要因のラベルの種類は表 4 と表 5 を合計すると 33 種類であった。それらを「FLP ダイナミックモデル」における要因と対照していくと、Curdt-Christiansen and Huang (2020) が「実際には密接に関連しており、時には曖昧である」(p. 176, 拙訳) と述べている通り本研究でも重なり合う要因もあったが、「FLP ダイナミックモデル」の外的要因の内、「社会政治的要因」(A ①) に 2、「社会文化的要因」(A ②) に 1、「社会経済的要因」(A ③) に 1、「社会言語学的要因」(A ④) に 1、内的要因の内「感情的要因」(B ①) に 3、「アイデンティティ要因」(B ②) に 4、「文化的要因」(B ③) に 1、「親が影響力を持つという信念」(B ④) に 10 が、対応すると考えられた。本項では、4. で明らかになった分析結果と、「FLP ダイナミックモデル」の要因との対照を通して示唆されたことを述べていく。

5.1 モデルには存在するが A 家の FLP 影響要因では見られなかった要因

「FLP ダイナミックモデル」に含まれる要因の内、A 家の FLP 影響要因の分析では「子どものエージェンシー」のみが現れなかった。そこで本項では、なぜ A 家の FLP 影響要因に「子どものエージェンシー」が含まれなかつたのかについて考えていく。

4.2.2.2 でバイリンガル X 高校入学に至るまでにヤスが別の高校を志望し受験していたことについて述べたように、実際には高校選択において、子どもは一度エージェンシーを発揮し、自らの選択で高校受験をしているのである。しかし、両親はヤスの中学での成績不振の状態から、ヤスの考え通りに高校が決まるとは考えておらず、バイリンガル X 高校に入るという親の FLP に影響を与えるほどのエージェンシーとはならなかった。また、4.2.2.2 で述べたが、子どもがエージェンシーを発揮したが実現しなかった別の高校選択については、〈地理的条件〉などを理由に反対されて賛成せざるを得なかつたために、ヤスは高校選択に自分が主体的に関わりえないと諦め、親の選択を受け入れた。その他に、「子どものエージェンシー」がなかつたことには、「親が影響力を持つという信念」が 10 含まれていることから「親」の影響が強かった FLP であるということも関係しているだろう。つまり、A 家の親はヤスの成長にあたり親は重大な責任を持っていると考えていたために、「子どものエージェンシー」による学校選択が高校選択の時代までに見られることはなかつたと考えられる。

5.2 モデルには存在しないが A 家の FLP 影響要因で見られた要因

本項では表 4 と表 5 において「FLP ダイナミックモデル」との対照において「該当無」となった A 家の FLP 影響要因について考察する。

両親を合わせたカテゴリーは表 4 と表 5 の合計で 28 である。この内、モデルとの対照で「該当無」となったカテゴリー、もしくは「該当無」のラベルを含むカテゴリーは【ヤスのタイ語能力評価】が 3、【ヤスの日本語能力評価】が 2、【ヤスのタイ語能力補完】が 1、【ヤスの日本語能力発達の不安】が 2、そして【地理的条件】が 2 であった。前者 4 種類のカテゴリーは計 8 で、それらは親による子どもの言語能力評価要因であると言え、残りの【地理的条件】はタイ社会における生活に関わる要因だと分けて考えることができる。そこで、タイの FLP 影響要因におけるこれらの必要性について考察していく。

親による言語能力評価要因にまとめられるカテゴリーは計8あり、全体が延べ28であることを考えると約3割を占めることとなる。つまりA家のFLP影響要因において、親視点で見る子どもの言語能力評価に関わる要因は、重要な位置を占めていると言えるだろう。またこれがA家に限ったことではないことは、泰日国際家族の調査をした柴山他（2020）でも言語能力評価が学校選択に影響していると述べていることからわかる。したがって、泰日国際家族のFLP影響要因には「言語能力評価要因」の視点を加える必要があると考えられる。

また、本研究は学校選択を軸にFLP影響要因を見てきたが、学校選択には【地理的条件】が深く関わってくることが4.2.2.1で明らかになった。そしてA家の場合は、FLPとは異なる高校選択希望を出した子どもに対して、親のFLPを守るために【地理的条件】が子どもを説得する理由として使われていたことが4.2.2.2からわかる。これらから、タイでは【地理的条件】と学校選択は深く結びついている様子が窺える。これについては、柴山他（2020）においても「居住地域の特殊性」（p.330）がFLPを実現するための学校選択に影響をしていると述べられており、タイではFLP影響要因に地域の条件が必須だということが言えるだろう。これらの背景には、タイでは首都バンコクであっても公共交通機関がいまだ広域で建設途中であり、移動には時間的負担と移動手段による体力的負担が大きいという、インフラが発展途上であるタイの社会的な状況がある。そのため、【地理的条件】と学校選択は強く結びついていると考えることができる。そして、1.1で述べた通りタイにおける学校選択は親がFLPを実現するための手段として大きくFLPの形成に関わるため、【地理的条件】はタイのFLP影響要因において必須の要因であると言えるだろう。また、タイの社会的背景として子どもに1人でバスや電車に乗せることも安全管理上問題があると考えられていることがあり、通学には親が同伴することが一般的である。したがって、「FLPダイナミックモデル」を泰日国際家族のFLP影響要因分析にそのまま適用することはできず、タイ社会における生活背景を含んだこれらを「社会生活的要因」として組み入れたタイ独自のモデルを形成する必要があるだろう。以上より、タイ独自のモデルには、外的要因として、【地理的条件】を含むタイという社会特有の「社会生活的要因」と、先に述べた「言語能力評価要因」が必須要因であると考える。

6. おわりに

本稿は、ある一時期の学校選択の要因を追うのではなく、学校選択ごとに分けてA家のFLP影響要因を分析してきた。するとA家の場合、FLPの信念は変化することはなかったが、そのFLPに影響する要因は学校選択ごとに異なっていたことがわかった。また、学校ごとの経験が次の段階の学校選択の要因として現れた。ここから見えてきたことは、ひとつの家族のFLPを理解しようとするならば、ある一時期に表明されたFLPをもってその家族のFLPだと断定し、そしてある一時期のFLP影響要因をもってその家族のFLP影響要因の総体と断定することは危険だということである。渡辺・久保（2018）も「学校選択は一度の決定で完了する性質のものではなく、常に意識され続けていくような問題」（p.13）と述べるように、FLPは動態的に捉えなければならない。このFLPの動態的様相を本研究では、学校選択ごとにFLPに影響する要因を詳細に分析したことで明らかにすることができたであろう。FLPが動態的なものであることを前提に、FLPが表明された時期の内的要因を詳しく見てその家族のFLPへの影響要因を探ることでその家族が無自覚に持っている信念を明らかに

していくことが、複数言語環境で育つ子どもの支援者に必要な構えと言えるのではないだろうか。しかし本稿はまだ1家族の事例研究であり、今後も引き続き父親・母親・子どもの家族調査を続けていき、タイ独自のモデルを形成し精査していきたい。そしてこれによって泰日国際家族のFLPの様相をさらに明らかにしていくことを目指したい。

注

- 1) 中等教育の一般的な課程に特別な授業料を聴取する形で英語を教授言語とする課程を設けている学校が2019年に全国に200校強あった(牧, 2020)。
- 2) 1995年に内閣で承認された外国語教育奨励策によって生まれたイングリッシュプログラムの規定で運営される私立校。タイのカリキュラムに則り英語とタイ語で教科学習が実施される。
- 3) 2019年には二重国籍児と呼ばれる国際児が14%在籍していた(嶋田, 2019)。
- 4) Curdt-Christiansen and Huang (2020)の「FLPダイナミックモデル」の図において「Language Intervention (言語介入)」として記されているものは、同論文の本文中では「Language management (言語管理)」として説明がされていて用語の使い方に混乱が生じるため、本稿においては「言語管理」と記載する。

引用文献

- 川上郁雄(2017)「移動する子どもをめぐる研究主題とは何か—複数言語環境で成長する子どもと親の記憶と語りから」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する—』8, 1-19. <http://www.gsjal.jp/childforum/dat/jccb08-1.pdf>
- 厚生労働省(2019)「人口動態調査 表番号9-18 夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数」<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003411850>
- サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編(2019)『質的研究法マッピング—特徴をつかみ、活用するために』新曜社
- 柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・タマヌーンラスマーマスムアン・矢野博之(2020)「泰日国際家族における親の『教育戦略』の特徴とその影響要因」『人間生活文化研究』30, 312-333. <https://doi.org/10.9748/hcs.2020.312>
- 嶋田俊之(2019)「国際結婚家庭の児童生徒への支援の可能性」第15回セミナー「複数の言語・文化で育つ子どものリテラシーを考える」報告(2)発表資料, タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会
- 轟裕美(2015)「タイの大学のインターナショナルプログラム—非英語圏におけるインターナショナルプログラムの課題と展望—」『国際協力員レポート・バンコク』海外学術動向ポータルサイト
- 深澤伸子・池上摩希子(2018)「タイにおける複言語・複文化ワークショップの実践—『自分を語り他者と体験を共有する場』を作り、繋げていく意義」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』9, 1-18. http://gsjal.jp/childforum/journal_09.html
- 牧貴愛(2020)「タイにおける基礎教育改革と中等学校をめぐる格差—『分を知る』社会の二者間関係—」『国際開発研究』29(2), 21-34. https://doi.org/10.32204/jids.29.2_21
- 松岡里奈(2016)「日本にルーツを持つタイの若者の自己形成過程に関する一研究—他者との関係性が与える影響に注目して—」『日本語・日本文化研究』26, 227-238.
- 松岡里奈(2018)「日本にルーツを持つ学生の日本語学習の意味に関する一考察—タイの日本人学校を卒業した学生の事例—」『日本研究論集』17, 71-88.
- 渡辺幸倫・久保康彦(2018)「タイ王国における日タイ国際結婚家庭の教育観」『相模女子大学紀要』81, 1-18.
- Bourdieu, P. (1996). *Distinction: A social critique of the judgement of taste*. (R. Nice, Trans.), Harvard University Press. (Original work published 1979)
- Curdt-Christiansen, X.L. (2009). Invisible and visible language planning: Ideological factors in the family language policy of Chinese immigrant families in Quebec. *Language Policy*, 8(4), 351-375. <https://doi.org/10.1007/s10993-009-9146-7>
- Curdt-Christiansen, X.L. (2014). Family language policy: Is learning Chinese at odds with learning English? In X.L. Curdt-Christiansen & A. Hancock (Eds.), *Learning Chinese in diasporic communities: Many pathways to being Chinese*, 35-56. John Benjamins. <https://doi.org/10.1075/aals.12.03cur>
- Curdt-Christiansen, X.L. (2018). Family language policy. In J.W. Tolleson & M. Pérez-Milans (Eds.), *The Oxford handbook of language policy and planning* (pp. 420-441). Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780190458898.013.21>

- Curdt-Christiansen, X.L., & Huang, J. (2020). Factors influencing family language policy. In A.C. Schalley, & S.A. Eisenchlas (Eds.), *Handbook of home language maintenance and development* (pp. 174-193). De Gruyter Mouton. <https://doi.org/10.1515/9781501510175-009>
- De Houwer, A. (1999). Environmental factors in early bilingual development: The role of parental beliefs and attitudes. In G. Extra & L. Verhoeven (Eds.), *Bilingualism and Migration*. (pp. 75–96) Mouton de Gruyter. <https://doi.org/10.1515/9783110807820.75>
- Fogle, L.W., & King, K.A. (2013). Child agency and language policy in transnational families. *Issues in Applied Linguistics*, 19, 1–25. <https://doi.org/10.5070/L4190005288>
- King, K., Fogle, L.W., & Logan-Terry, A. (2008). Family language policy. *Language and Linguistics Compass*, 2(5), 907–922. <https://doi.org/10.1111/j.1749-818X.2008.00076.x>
- King, K.A., & Fogle, L.W. (2013). Family language policy and bilingual parenting. *Language Teaching*, 46(2), 172-194. <https://doi.org/10.1017/S0261444812000493>
- Ochs, E., & Schieffelin, B.B. (2011). The theory of language socialization. In A. Duranti, E. Ochs & B. B. Schieffelin (Eds.) *The handbook of language socialization*. 1-21. Wiley-Blackwell. <https://doi.org/10.1002/9781444342901.ch1>
- Spolsky, B. (2004). *Language policy*. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511615245>
- Spolsky, B. (2009). *Language management*. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511626470>
- Wilson, S. (2020). *Family language policy: Children's perspectives*. Palgrave Macmillan. <https://doi.org/10.1007/978-3-030-52437-1>